

彼女と出会った、というか彼女のことを僕が認識したのは高校の同窓会だった。その頃の僕は酒の味が嫌いだった。飲み屋という騒々しい空間が大嫌いだった。しかし、総じて同窓会というものは飲み屋で行われるもので、皆は当然のように酒を飲む。仕方なく僕は出てくる味の濃いおつまみを食べながら、酔ったやつこのループする話に相槌を打っていた。

「そういえば。青山夏希、覚えてるか？」

はたと思いついたかのように彼の目は丸くなる。続いて彼は赤ら顔のまま、にやにやと下賤な笑みが浮かべる。

「誰？ それ」

僕は塩辛い枝豆をしゃぶりながら聞いた。

「ほら、あっち」

彼が指を指した先にはきれいな女性がいた。頭の中で名簿をパラパラとめくるが、彼女らしい人には思い当たらない。

「あんな子、いたか？」

「イメチェンしたっばい。美人だよな」

青山夏希、は髪を高い位置で一つにまとめて、清楚な服に身を包んでいた。少し垂れた目と眉が彼女の顔に親しみやすさを加えている。

「おれ、今日はアイツ行こうかな」

「止めとけよ。お前、それで成功した試しがねえじゃん」
ハハハ、とお互い笑いあつて、それで話は流れた。

「相川、拓也、くんだよな」

涼やかな声が耳を横切る。その方向を見ると、青山夏希、がいた。

「うおっ、びっくりした」

僕が口に含んでいた枝豆を、思わず吐き出しそうになると、彼女はふふと笑った。

「びっくりした？ わたし、変わったでしょ」

「変わったって？」

枝豆をさやからだしながら、彼女に答える。さっきの下世話な話を問い詰めにでも来たのだろうか。彼女は口角を柔らかに上げる。

「誤魔化さなくていいよ。ほら、私、いわゆる陰キャだったでしょ？」

「覚えてないよ」

そっか、と彼女は呟く。気まづくなつて皿に乗っているから揚げを一つ頬張った。

「……ねえ、相川君って、お酒の味、苦手だよな？ もうこんな飲み会抜けよう？ 私も、もう嫌なんだ」

から揚げの欠片が気管に入った。咽ながら彼女の顔をチラリとみる。端にいるせいかわいらしい人はいない。

「僕ならともかく、君はダメだろ」

「なんでさ」

「目立ちたくないし、そんな気分じゃないし……」

言葉尻がしぼみ、やるせなくてウーロン茶を口に運ぶ。

「呼気が酒臭いのは嫌なの。相川君しかいないの」

僕はから揚げと青山の言葉をゆっくり咀嚼した。誘われるのは、初めてだった。いつも誘ってばかりだった。

なんで僕なのかとか、そもそもなんで僕のこと知ってるんだとか、いろいろ聞きたかった。

「青山、は、何か荷物とかあるか？」

僕の言葉に青山は腕を広げ、服装を見せた。紺色のセーターに茶色のコート、シンプルな鞆を右肩にかけている。

「気づかなかった？ 相川君に話しかけたときから私は準備できてたよ」

小皿に残った最後のから揚げを口に放り投げ、そばに置いてあったジャンパーを掴んだ。二人で立ち上がった瞬間、飲み会のざわめきが十分の一になり、沢山の目がこちらを向く。

「あれー？ 夏希ちゃん、お持ち帰りされるの？」

明るい髪色の男が青山に向かって叫んだ。それを皮切りに場がどよめく。

「逆。行こ」

青山は短くそう言って、僕に軽く目配せをした。遠く

で青山のことを教えてくれた男が、僕を睨んでいる。僕は彼に、軽く会釈する。彼は驚いた顔をして、悔しそうに笑いながらこちらに親指を立てた。派手髪の男はよるめきながら立ち上がり、こちらに近づく。顔が赤い。息が臭い。元々細い目をさらに細めて、僕をチラリと見た。「誰だっけー。カワシマくん、だっけ？ 夏希ちゃんお持ち帰りするの。へー」

当てつけのように細目は僕に言う。僕は違うともいえず、派手髪から視線を外した。周りのガムみたいな視線たちが不快だ。青山はどんな顔をしてるだろうと、目を向ける。彼女はニコリと笑ったままそれを崩さない。派手髪はついと目をそらし、青山だけを凝視した。性欲の混じった瞳はえも言われない不快感が滲んでいる。

「まだいてよ。全然喋ってないし、先だって楽しくしゃべってたじゃん。皆まだ夏希ちゃんといたいよ」

派手髪が周りに目配せをする。頭の色が明るい男から順に頷いていく。女たちは変な笑みを浮かべてヒソヒソと話している。たまたま僕はうつむいた。青山は何も言わない。やっぱり僕なんか誘いに乗ったのがいけなかったんだ。ゆるりと視線を上げ、青山の笑顔を見る。

「あー……青山、残ったら？」

青山は張り付けた笑みを止め、無表情になった。彼女の無表情には異常なくらい威圧感があった。

「ハハ。やめてよ、相川君。誘ったのは私じゃん」

青山はカバンの紐を強く握り直す。同時に僕の腕を強く掴み、歩き始めた。僕もそれに引きずられるように歩く。僕は青山に合わせて足を動かしながら、彼女を見た。

「青山、残った方が良いんじゃないか？」

青山は呆れたように僕を見た。

「だから、やめてよ。続きはホテルに行つてからにしよ
う」

「ホテル」

「そう、ホテル。ラブホテル。意味が分からないなんて
言わせないよ」

青山はそう言いながら、居酒屋のドアを開けた。冬らしい、律するような冷たい風が青山と僕を刺す。

「こういうの、初めて？」

「逆でなら、何度か」

「プレイボーイね」

「嗜みだろ」

青山は顔を崩し、鬱蒼としたネオンの森へ歩みを進めた。

青山が見つけたホテルは綺麗な普通のラブホテルだった。謎のモニUMENTを傍目に液晶パネルの前に二人で立つ。

「適当に決めていい？」

「あ、ああ」

青山は手早く画面を確認した。手慣れているな。別にそれはいいのだけれど。途端に何か底知れぬ不安感に襲われた。

「二〇二号室」

青山はこちらに鍵を渡してくる。それを受け取り、二人でフロントを少し歩き回る。奥に観葉植物に隠れるようにしてエレベーターがあった。

「ラブホテルらしい」

青山はふふっと笑いながらそう呟いた。

「そうだな」

僕も笑い返し、エレベーターの昇るボタンを押す。

「青山はホテルには何回ほど？」

「青山、じゃない。夏希」

青山は話を逸らす。僕はわざとらしくため息を吐いた。そこでエレベーターのドアが開く。扉を押さえながら、中に入った。まだ関係が出来上がっていない二人では、少し狭いと感じる。このくらいの方がカップルにはいいのだろうか。僕は改めて彼女に向きなおる。

「夏希、はホテルには何回来たことがあるんだ？」

彼女は顎に手を当てる。暫く考えて口を開いた。

「今まで食べた米粒の数を覚えているのかい？」

夏希、は得意げに笑った。

「え、あ、そ、そうなのか」

彼女から思わず目を逸らす。エレベーターの浮遊感を感じ、チンと音が鳴った。目の前の扉が開く。暗いフロントに比べて、煌々と照るフロアに一瞬たじろいだ。

「嘘だよ。五回」

夏希が馬鹿にするかのように言いながらエレベーターを出た。

エレベーターから出て目の前の壁には、二階のフロアマップが掛けられていた。部屋は二〇一から二一〇まで数字と四角が整然と並んでいた。廊下を見通すと左側に茶色の扉が並んでいて、間接照明に照らされていた。

「このホテルには？」

「初めて。私聞いてばっかだけど君はどうなのさ」

「ホテル自体は四、五回。このホテルは初めて」

「そう。お揃い」

夏希は嬉しそうにそう言った。

鍵を持っていた僕が先に部屋に向かった。金色で202と書かれている扉のノブを回すと、ガチャリと音がしてドアが開いた。肩越しに部屋をのぞくと、大きな白いベッドが見える。オレンジの間接照明に照らされ、満月みたいに輝いている。

「良さげだな」

そう言って左手にあったドアを開ける。

「ここが、トイレで……」

そしてその隣のドアも明ける。

「こつちがお風呂だな。ドライヤーとジェットバスもある」

夏希は興味なさそうにふうんと頷いた。気まずくて部屋にさっさと入る。夏希も僕に続く。

「シャワーは浴びる？」

夏希がばふっと音を立てベットに座る。僕は部屋の入口あたりに立ったまま動けないでいた。夏希はムードとか雰囲気を大事にしないタイプなのだと思った。

「青……夏希は逆に、浴びないのか？」

「君の好みに合わせる予定」

「じゃ、浴びてくれ」

「了解」

ベッドサイドの棚にタオルが数枚積まれていた。夏希が先にタオルを数枚掴んで浴室に向かう。僕は手持無沙汰になって部屋を眺めていた。

ふと、なんで夏希が僕をホテルに誘ったのか気になった。僕じゃなくてもよかったのに。夏希陽キャどもが引き留める程度には、夏希は美人だ。対して僕は平々凡々。顔も良くないし、財布も胸板も厚くはない。

水音がやけに耳に響く。ぴちゃ、と浴室内で夏希が歩いているだろう音が、部屋に響く。続いて水に流れる音がとめどなく部屋を埋める。喉に何かが絡みついたように、呼吸がしにくくなる。指先がの感覚が消えていく。脳が馬鹿になっていく。

ベッドに全体重を預けて寝転ぶ。マットレスはラブホらしく、僕を優しく包み込んだ。そのまま肺まで押しつぶされてしまいそうな感覚だ。

暫くして、水音が止んだ。微かに空調の音がする。換気扇を回したのだろうか。一人じゃないのに一人みたいだ。今から人類ができる行為の中で一番孤独じゃない行為をするはずなのに。

「あがったよ」

奥から夏希の声が聞こえた。同時に扉が開く音がする。「ああ」

喉から気の抜けたような声しか出なかった。ベッドから体を起こすのにも酷く力が要った。

「僕も入ろうかな」

夏希は無防備に僕の前に姿を現す。湿気を纏った夏希は同窓会の際の華やかで清楚な出で立ちとは違っていた。バスローブを緩く着た彼女は、艶やかだった。僕の性欲バフもかかっているのだろう。気にしない素振りで僕は浴室に向かった。

浴室は思ったよりも乾いていた。壁から突き出たポタシを押す。上からお湯がとめどなく流れた。

初めてじゃないのに、妙に体が重い。重力が三倍になったと思えるくらい、身体が言うことを聞かなくなった。夏希とこれからすることに集中できていない気がする。こ

髪が濡れないようにして、うなじに水流を当てる。こ

れからの段取りとか、どうやればいいのかとか、いろんなことが頭を駆ける。もう、そんなこと考える時代は卒業したはずなのに。

駄目だ、と頭を振り思考の川を止める。今はそんなこと考えている場合じゃない。ちゃんと興奮しなければ。考え事をしていては、行為をやり遂げられない。

バスローブの紐を少し硬く締め、唇を引き結び浴室を出る。夏希と目が合って、彼女は僕を小馬鹿にするように笑った。

「そんな緊張した顔してどうしたの」

「べつに」

僕は自棄になったみたいに夏希の横に座った。ベッドは深く沈む。夏希と視線が同じくらいになった。それを嫌がるように、夏希はベッドに向かって倒れこんだ。天井を見上げながら、夢見心地で夏希は口を開く。

「ねえ、なんで私が君を誘ったと思う？」

夏希がいるのとは反対方向に目を逸らす。僕が良い男だから、とか、好みの顔だったから、とか自惚れたことを口に出しかけて、喉の奥で止めた。答えあぐねていると、夏希がこの世の全部を馬鹿にしたみたいな声で笑う。「君が一番、あの陽キャグループに馬鹿にされていたからだよ」

馬鹿にされていた、の言葉でドツと心臓が鳴った。手足から臓器の全部に至るまで全部が鈍く痺れる。

「君は鈍感で生真面目でか弱くて……。なんというか、純であることは時に馬鹿にされる対象なんだ、と思う。

ごめん。君のことを馬鹿にしてるわけではないんだ。私は君のそういうところ、いいと思うし、好いている。そうじゃないとホテルになんて誘わないしね」

怒りとか諦めとか衝撃がごちゃ混ぜになって、身体が動かなかった。夏希のフオローらしい言葉は頭の中を走るだけで意味をなさなかった。

「私はね、高校でいじめられていたんだ。あの陽キャグループに。無視されたり……。あとは、あ、ハハハ、他は言えないなあ」

夏希は自嘲してベッドにうつぶせになった。夏希の甘い体臭が鼻をかすめる。

「知らなかった」

「だろうね。拓也君はそういう人だ。とことん他人に興味なくて、自分と向き合ってばかりだった。そういうところだよ、君が馬鹿にされてた理由」

一気に言い切って、夏希は軽く息を吐いた。

「キレーになって見返してやるうって、美容専門学校行って垢ぬけてBAになったの」

「BA？」

「ビューティーアドバイザー」

僕の問いに夏希は弄して答えた。それを聞いても意味が分からず、英語のリスニングのように、単語を聞き流

す。

「で、満を持して同窓会行って、口説かれて、気持ち悪くなって、君を連れ出して逃げてきた」

夏希はため息を吐く。こういうときに、気の利いた言葉が出てこない。『うるせえ』なんて言いながらキスでもすれば、これからの人生はラブコメになるだろうか。

それとも顔のよくない僕は頬を叩かれておしまいだろうか。

「……飲み会から出るときに恨み言の一つや二つ、吐けばよかったじゃないか」

やっこのことでひりだした言葉とともに夏希を見る。性欲は案外簡単に退いてくれるものだ。俯せの夏希は乾いた笑みを漏らす。

「拓也君、虐められたこととかないでしょ。こいつらは大人になっても、見た目が変わっても、ずっと弱いまま。

あの時、『あなたみたいな酒臭い不細工、願い下げ』とか、言いたかった。頭の中でなら、それ以上にひどい暴言だって浴びせられたのに」

夏希も僕も何も言えなくて、俯く。

「復讐、つてのに心を燃やしてみただ、やっぱり駄目だった。弱いままだった」

夏希は自傷するように呟く。彼女はおもむろに体をねじって天井を見る。間接照明がクリーム色の天井をぼんやりと照らしている。

「強くなりたい」

その切実さが僕を射抜いた。彼女は何か失敗してしまつたみたい、片手で顔を覆つた。それがひどく妖艶に見えた。

「爽快だつたよ、僕は。君みたいな美人に連れ去られて」
そう言つて初めて、僕は夏希のことを助けたいのだと分かつた。僕は多分、うつすら、夏希のことが好きになつていた。性行為は好きな人とするものではない、なんてわかりきつたことなのに。

「綺麗なんだから、いい男捕まえて、玉の輿だ何だであいつら見返してやればいいんじゃない？」

夏希に幸せになつてほしい。そう思いながら僕は言つた。

「復讐は何も生まない、とか言わないんだ」

「僕は爽快だつたからね」

軽口に夏希は笑つた。その笑顔に僕は心底安心した。

ぼうと夏希を見ていると、夏希が不貞腐れたように唇を尖らせた。

「ここに慰められに来たみたい。私、そんなメンタルの弱い女じゃない。ねえ、拓也君。シょうか」

夏希が笑う。僕はたじろぐ。

「な、何を、つてか、なんで。そんな雰囲気じゃなかつたろ！」

「そりゃ、ラブホテルに来たからね。それに私から君を

誘つたから。責任は取らないと」

夏希はへたくそなウイソクを僕に放つた。自分のバスローブの結び目を解き、僕に両腕を差し出す。夏希は僕に嬉しそうに口を開く。

「ねえ、ありがと」

夏希の両腕の間に体を滑り込ませながら僕は言う。

「……どういたしまして」

そのまま僕は夏希の口にキスをした。少し薄い彼女の唇は確かな弾力を持つている。唇同士が触れ合つたのを合図にして、夏希の口が微かに開いた。僕は恐る恐る舌を差し入れる。舌先同士が触れ合つて、離れて、また触れ合つて。少しづつキスは深くなつていく。舌先がこんなにも敏感だということを知つた。

夏希とのキスは微かに甘い。昔、口の中では痛みが辛みになると教えてもらった。ならば、夏希のキスは安寧なのか。

夏希の舌が少し強引に口の中に入つてきた。考え事をするな、私だけを見ろ、と言っているような。

キスをしている間に、夏希が僕のバスローブを剥いたから、僕も同じように彼女のバスローブを脱がせた。

思つたより細かつた。

匂い立つこの美しさは、気の強さは、こんな細い身体から生まれているのか。彼女の身体に手を添わせると、確かな肉とその下の骨を感じた。

滑らかな彼女の肌と僕の手の皮が擦れあう。皮膚同士
の擦れあう音が異常なくらい耳に響く。世の中にはこん
なにも興奮する音があるのかと思つた。

「撫ですぎ」

下から声が湧きだす。夏希は呆れたような顔で僕を見
ていた。

「いいじゃん」

「貧相な体だから」

「それでもないよ」

僕は笑つた。

「ねえ、拓也君。君は幸せになつてよ」

肌が擦れあう音に耳を傾けながら、夏希はそう呟いた。

僕は一瞬、返事に窮した。

「お前もな」

夏希はすこし悲しそうに笑つた。その顔が、『私には
幸せになる権利がない』と言つているみたいで、思わず
彼女を抱きすくめた。

「お前はすごいよ」

「なにが」

「僕って男一人をこんなに夢中にさせてるんだぜ」

僕の肩に頭を押し付けて、夏希は僕の腕から逃げ出そ
うと身をよじる。僕は逃がすまいともっと強く抱きしめ
る。

「あはは、苦しいよ」

僕は夏希の笑い声を聞きながら、切実に彼女を抱きし
めた。

幸せにする、なんて言えるほど僕は傲慢になれないけ
れど、せめて今だけは。今だけはお前は幸せになつてい
いと勘違いしてくれ。